

令和7年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから18ページまであります。

受験 番号		氏 名	
----------	--	------------	--

森村学園中等部

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

火の明るさや暖かさには人と人を寄せあい、結びつける力がある。それはいまにはじまったことではない。狩猟採集生活しゅりやうさいしゆをしていた時代から、火は人とともにあった。

(中略)

火を囲むことで得られたのは身の安全や、料理だけではない。夜の焚き火たきびは「物語」を生み出す場にもなった可能性がある。

南部アフリカの先住民サン人の研究を行ってきたアメリカの人類学者、ポリー・ウイスナーは、長年にわたってサン人のコミュニティにおける会話の内容について調査した。その結果、明らかになったのは、^①彼らの「日中の会話」と「夜の会話」の内容がいちじるしく異なることだった。

「日中の会話」の内容が生活上の不安や恐れ、人のうわさ話、お金や買い物、狩り、それにジョークで占められていたのに対し、「夜の会話」の8割を占めていたのは物語と神話で、そのほかの話題も歌や踊りなど儀礼ぎらいにかかわるものだった。

昼の光の下での会話が、目の前の現実に対処するための実用的な知恵ちえや処世術しよせいじゆつなどの情報交換じゆうかうかんであるのに対して、焚き火を囲んで語られる夜の会話は、物語や神話、つまり彼ら先祖や精霊せいれいや動物など、時を超えた記憶きおくの世界と結びつけるものだった。

火を囲んで夜の寒さをしのぎつつ物語を聴く。それは狩猟採集の暮らしの中で、おのずと生まれた営みだったのだろう。焚き火の暖かさが与えてくれる落ち着きや安心に包まれながら語られる物語は、心に素直に染みこんでいったはずだ。

そこで語られたのはどのような物語だったのだろうか。今日、サン人に伝えられている物語といえは、たとえば、この世界はどのようにしてつくられたのか。なぜ昼と夜があるのか。人はどのようにして火を手に入れたのか。サバンナにはどのような動物たちが暮らし、どのような知恵を駆使くしして生きているのか。勇敢な狩人かりうどはいかにしてライオンを欺あざむいたか——といったようなものだ。

こうした物語が示すものはなにか。それは自分たちが暮らしている世界の地図だ。世界はどのようなところなのか。そこにはどのような恵みがあり、どのような危険があるのか。いわば物語とは、それを語る集団の人びとにとつて、世界を歩くためのガイドブックのようなものだ。物語にはもう一つの詳しいな役割がある。その地図の中の自分たちの現在地を示すことだ。自分たちはどこにいて、どの方向へ向かおうとしているのか。その方向はまちがっていないのか。どちらへ向かえば自分たちは幸福になれるのか。そのためにすべきことはなにか、すべきでないことはなにか。つまり、物語は、その共同体の道徳観みとくかんや倫理規範りんりきはんと結びついている。

(中略)

物語は、なにが善で、なにが悪か、なにが正しく、なにがまちがっているかを伝える。善とされる正しい行いをすれば、その集団は豊かで幸福になり、集団に属する人びとの絆きずなも強固なものになることを教える。

しかし、そこには落とし穴もある。もし善とされる行為を行ってゐるのに、豊かになれなかったり、幸福になれないとしたら、それはなぜか。そこに新たな物語が生まれる。つまり、豊かになれないのは、自分たちをじゃましてゐる「悪」や「敵」が存在しているからではないか。だとすると、豊かになるためには、この「悪」や「敵」を倒さなくてはならない。それが正義であり、そのためには暴力もやむをえない——。こうして、[＊]同朋との友情や絆を強める物語は、部外者に対する敵意や攻撃を正当化する「差別と暴力の物語」へとすり替わる。

もちろん、世界はそんなに単純な物語におさまるものではない。しかし、単純でわかりやすいがゆえに、このような物語は世界中に広まっていた。古代の神話か現代のラノベやマンガまで、「善」や「正義」の名の下に暴力によって「悪」をこらしめるという物語は枚挙にいとまがない。

③ 実際、このような物語に従って、ある人びとを共通の「敵」と見なしてたたいたり、差別したりすることは、再三にわたって歴史の中でくりかえされてきた。その「敵」は、時代や場所によって、「先住民」だったり、「異教徒」だったり、「異民族」だったり、「少数派」だったりした。

(中略)

④ 集団のレベルだけではなく、個人のレベルでも、物語は人びとに強い影響を及ぼす。個人のレベルでいう物語とは、民話や神話や小説作品などをさすのではなく、ふだんの生活における現実のとらえ方の癖のようなものだ。

I、スポーツをやっているAくんは、練習ではいい成績を出していたのに、ある大きな試合でミスをして、まわりの期待に応えられなかったとする。そのミスのショックがあまりに強くて、Aくんは「自分は肝心なところで失敗して、まわりをがっかりさせるダメな人間だ」と自己規定してしまう。これが物語だ。

実際には、多くの試合ではミスをしていないし、まわりもミスなど気にしていなかったとしても、自分ではそのことに目が向かず、「自分は大舞台で人に迷惑をかける」という物語にとらわれつづける。このように、過去の記憶の中から印象に残った要素を、自分の感情にとって納得がいくようにつなぎ合わせてできたものが物語である。

どうして、Aくんの中に、そのような物語がつくられたのだろう。Aくんにとっていちばん問題だったのは「人に迷惑をかけた」という思いだ。「人に迷惑をかけてはいけない」というのは日本社会における暗黙のルールとされている。それは、このルールを守れない者は世間から排除されるぞという警告でもある。

このルールを破ってしまったと感じたAくんは、自分で自分を罰するための物語をつくりだす。それが「自分はまわりをがっかりさせるダメな人間だ」という物語だ。自分を責め、否定することで、世間に対してゆるしを求める。

世間にはほかに、このようなルールがたくさんある。(中略) こうしたルールにもとづいて、人びとの心の中に物語がつくられる。ルールを守って成功した人であれば、たとえば「あきらめなければ夢はかなう」といった物語が、ルールが守れなければ、Aくんのような物語が。

II、あきらめずに努力して夢をかなえた人の物語は人を魅了する。人に助けを求めずに、がんばった人の物語が感動を呼ぶこともある。

だが、それはいつでも、だれにでもあてはまるわけではない。人は、それぞれ性格もちがえば、置かれている環境もちがう。それでも、このような物語が広く浸透している環境の中にと、自分でも気づかぬうちに、それが世界を見るときの基本的な枠組みになって、Aくんの例のように、そこから逃れられなくなつて、現実が見えなくなつてしまうことがある。

体調が悪いときに「人に迷惑をかけてはいけない」からといって無理をしたり、「あきらめなければ夢はかなう」と信じて、明らかに自分に不向きなことをつづけたりとすると、物語は本人を追い詰める。⑤「がんばりきれずに迷惑をかけてしまつたり、あきらめてしまつたりすると、そんな自分を責めたり、否定したりする。そうなる」と物語は「呪い」へと転化してしまふ。

呪いとはなにか。一般的には、それは言葉や儀式によつて、他人に災いや不幸を及ぼす行為とされている。しかし、ここでいう呪いとは、自分の中にすりこまれた物語が、自分自身を追いつめ、萎縮させ、罪悪感や恥辱感や無力感を与えるように働くことだ。ミスをするたびに親から「あんたはなにをやつてもダメだ」といわれつづけてきた子どもが、その言葉が呪いとなつて、なにも問題がないのに、自分を信頼できず、粗末に扱ふようになってしまふような場合だ。

⑥攻撃的な言葉だけが「呪い」になるわけではない。どのような物語も、そこから逃れられなくなれば呪いになる。「ふつうの家族つてすばらしい」とか「親子なら、きつとわかりあえる」という言葉も、スタンダードな家族や親子の形が存在する、という前提の上に成り立っている。そうでない家族や親子関係の中で育つた人にとっては、それもまた呪いになりうる。

物語とは世界を理解するための地図のようなものだ。地図なしに、私たちは世界を理解することはできない。III、どんなに精巧につくられた地図であつても、それは世界そのものではない。⑦古くなつた地図や、役に立たなくなつた地図を使いつづける必要はない。物語も同じである。物語が呪いになるとは、いわば地図を世界そのものだと思ひこんで、ほかの見方ができなくなつてしまふことだ。

自分で自分を責めたり、否定したりしているとき、そこにはかならず自分がとらわれている物語がある。それに気づくことが、呪いから自由になるきつかけになる。物語を手放すのは怖いことかもしれないが、手放したとしても世界はなくなるならない。

ふたたび焚き火にもどらう。焚き火は人に暖かさをあたえ、料理法をもたらし、物語の場を提供した。名前も素性もわからぬ見知らぬ相手であつても、利害を離れて、互いがそこにいることをゆるしあえる。それが焚き火の空間だ。

そして、焚き火には、もうひとつ大切な象徴的役割がある。それは「燃やす」ということだ。枯れ枝を火にくべるように、日中の暮らしの中ですりこまれてしまつた「差別と暴力の物語」や「呪いの物語」を火にくべて、灰にして、夜空にかえす。生きることを不自由にしていくるもろもろの呪いを火に投じ、この世界を新しく創造しなす。そういう焚き火の時間を、私たちの中にどのようにしてつづけることができる

だろうか。

(田中真知『風をとおすレッスン 人と人のあいだ』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

* 処世術……うまく世を渡っていく方法。

* 倫理規範……人として守らなければならない行動の基準。

* 同朋……仲間。友人。

* ラノベ……ライトノベルの略。軽快な文体で読みやすい小説の総称。

* 自己規定……自分がどんな人間であるのかを自分で定めること。

* 恥辱感……自分の欠点・失敗などを恥ずかしく思う気持ち。

問一

① 「彼らの『日中の会話』と『夜の会話』の内容がいちじるしく異なる」とありますが、その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 日中にはジョークやうわさ話など気楽な会話を楽しんでいたのに対して、夜はまじめで深刻な内容を議論していたということ。
- イ 日中に友人と買い物をしたり会話を楽しんだりしていたのに対して、夜は個人それぞれで儀式や伝統を学んでいたということ。
- ウ 日中の話題は暮らしに関するものが中心だったのに対して、夜は民族に伝わる物語や神話に関する話題が中心だったということ。
- エ 日中に生活に役立つ実用的な情報を交換していたのに対し、夜は昔話や作り話などのとりとめのない話を共有していたということ。

問二

——②「そこには落とし穴もある」とありますが、ここでの「落とし穴」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 正しい行いやよい行動をとっているのにうまくいかないときは、「敵」が自分たちを阻害しているからに違いないと思いきんてしまふこと。

イ 集団に属する人がみんなて正しい行いを続けていけば、その集団に属する人たちは必ず豊かて幸せになれると信じて疑わなないこと。

ウ 自分たちの絆や友情を強めるためには、自分たちの集団に属さなない人たちを進んで排除したり攻撃したりする方がいと思つてしまふこと。

エ 仲間との絆を深めるために外部集団や自分たちの「敵」をこらしめることが、気づかないうちに暴力や差別を肯定することになつていふこと。

問三

——③「このような物語に從つて、ある人びとを共通の『敵』と見なしてたたいたり、差別したりすることは、再三にわたつて歴史の中でくりかえされてきた」とありますが、この具体例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヨーロッパでは中世から近世にかけて、社会的に孤立した弱い立場の人たちを「魔女」に仕立て上げ、彼らを処罰する「魔女狩り」が行われた。

イ 第一次大戦後にドイツで権力を握つたナチスは政府を利用し、古代から差別を受けていたユダヤ人を虐殺し、数百万人もの人々が犠牲になつた。

ウ ロシア革命の翌年に日本国内でシベリア出兵が発表されると、商人が米を買い占め、物価が上昇したので庶民達は苦しい生活を強いられた。

エ 明治期の日本政府は北海道のアイヌ民族を野蛮なものともなし、アイヌ語の使用や文化の継承を禁止する法律を制定し差別や圧政を行つていた。

問四 ——— ④「個人のレベルという物語」について次の問いに答えなさい。

- (1) 「個人のレベルという物語」とはどのようなものですか。それを説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 実際に経験したり周囲で起こったりした出来事と世間のルールをつなぎ合わせて、自分の考えや価値観に合うように作られるもの
イ これまで個人が経験した様々な出来事を世間のルールとうまく組み合わせ、より多くの人が理解できるように作られるもの
ウ 個人の日頃の行いと日本社会の暗黙のルールを照らし合わせ、そのルールを守れなかった際に自分を戒めるために作られるもの
エ 代々語り継がれてきた民話や神話と現代に残る世間のルールをつなぎ合わせて、自分の行動を規定するために作られるもの
- (2) 本文に登場するA君の物語は何のために作られたのですか。次の() に合う一文を本文中から求め、始めの八字をぬき出して答えなさい。
- () ため。

問五 I III に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア しかし イ たしかに ウ もし エ あるいは オ だから カ たとえば

問六 ——— ⑤「物語は本人を追い詰める」について、次の問いに答えなさい。

- (1) ここで用いられている表現技法は次のうちのどれですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 倒置法 イ 直喩法 ウ 擬人法 エ 対句法 オ 体言止め
- (2) 「物語」に追い詰められた結果、その本人はどのようなになりますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 「物語」が見せる理想に引きずられてしまい、現実を冷静に見て判断することができなくなってしまった。
イ 「物語」に自己を否定され続けることで、前向きに物事に挑戦する力や頑張る力が失われてしまう。
ウ 「物語」がかかる呪いの言葉によって、災いや不幸がこれから自分の身に起きると信じ込んでしまう。
エ 「物語」の期待にこたえようとし過ぎることで、本来の実力が発揮できずに自分らしさが失われてしまう。

問七 ——— ⑥「攻撃的な言葉だけが『呪い』になるわけではない」について、中学生が話し合っています。次の会話文を読んで後の問いに答えなさい。

けんたさん 「『攻撃的ではない言葉』なのに『呪い』になってしまっなんて…。」

あすかさん 「本文の例にある『親子なら、きつとわかりあえる』なんて、呪いというよりも相手を励ます^{はげ}ステキな言葉よね。」

ようこさん 「う〜ん。でも親子関係が上手くいっていない人にとっては呪いになると思うよ。きつとそういう人は、何かうまくいかなかった時に『自分は親子関係が上手くいっていないからこんなダメなんだ…』と思つて自分を責めてしまっんじゃないかな。」

けんたさん 「まさに『呪い』だね…。そう考えると他にも例えば『お姉ちゃんだからしつかりしてるね』とか『何でも話せる親友がいるのは幸せなことだ』という言葉も人によっては呪いになるかもしれないよね。」

あすかさん 「え〜！ そんなこと言ったらどんな言葉も全部『呪い』になつてしまっんじゃないの!?!」

ようこさん 「大丈夫。^{だいじょうぶ} 本文では呪いにかかつてしまっような時の対処方法^{たいじょほう}も書かれてるよ。」

(1) けんたさんの発言にある~~~~~X「お姉ちゃんだからしつかりしてるね」~~~~~Y「何でも話せる親友がいるのは幸せなことだ」はそれぞれ次のような人にとつて、どのような呪いになると考えられますか。X・Yのいずれかを選び、自分で考えて答えなさい。

X 長女もしくは下に妹弟がいる人

Y 自分の気持ちを人に伝えるのが苦手な人

(2) ようこさんの発言にある「呪いにかかつてしまっような時の対処方法」を本文から読み取り、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問八 ——— ⑦「古くなった地図や、役に立たなくなった地図」とありますが、これらは何の例えですか。その内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 古い常識や時代に合わなくなった価値観

イ 無意識のうちに自分の中に根付いているものの考え方

ウ 多様性を無視した社会に広がるルールやマナー

エ 時を超えて語り継がれてきた民話や神話

問九

本文の論の展開を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人々が焚き火を囲むことで「物語」が生まれたことを述べ、集団の物語と個人の物語を比較しながらそれらの負の部分の説明し、

最後は再び焚き火の話にもどり、古い物語は全て燃やして新たな集団の物語を創ることの大切さを語っている。

イ 古代から火は人間の生活にとっていかに必要だったのかを紹介し、焚き火から生まれた様々な個人の物語がもたらした歴史的な悲劇について触れ、そのような物語も燃やして灰にすることで人間は過去を乗り越えてきたと語っている。

ウ 先住民サン人が焚き火を囲むことで先祖の物語を伝えてきたことを説明し、物語が世界地図のようにサン人たちをガイドする存在であることを語りながら、最後に古くなった地図を燃やすことの必要性も付け加えている。

エ 集団の中で受け継がれてきた物語は夜の焚き火を囲む中で生まれたことを説明し、集団の物語の負の面に触れながら個人の物語に話題が移り、最後には再び焚き火の話にもどり、焚き火の特性で新たな「物語」を創造することを説いている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

主人公の弘毅の家は、祖父が南部せんべい屋を営んでいる。バレンタインデーの前日、弘毅が学校から帰ると姉の芽衣が店番をしており、芽衣の中学時代の同級生たちが店を訪れていた。

姉は、数人の学生の相手をしているところだった。彼らはコートやダウンジャケットを羽織っており、揃いのチエックのパンツやスカートをはいている。

弘毅は、芽衣姉ちゃんが受験に失敗した八戸市の高校に通う人たちだとピンときた。なぜなら去年、食卓にまで学校のパンフレットを持ち込んで付箋を貼りながら「友だちと受験する」と熱心に見ていたから、その制服は弘毅の目にも焼きついていたのだ。

パンフレットは合格発表のあとしばらくたったゴミの日に、町指定ゴミ袋にギュウギュウにねじられて突っ込まれていた。黄色い付箋もそのままだった。

今、姉は町内の三津高校へ通っている。

居並ぶ女子高校生たちは、弘毅にも見覚えがある。

中学生のころ、時々小田せんべい店に立ち寄って芽衣姉ちゃんと出かけていた人たちだ。でも高校生になってから彼女たちが来ることはなくなった。

「ヒロキ君、久しぶりだねえ」

女子の一人が笑顔を向けて来た。コウキだよ、と腹の中で訂正しながら頭を下げる。

芽衣姉ちゃんは黙って、作り笑いを彼女たちに向けている。ガチガチに硬く節制された笑顔だ。せんべいの入った木箱がずらりと並んだその内側に座っていて、決して向こう側には立たない。木箱をまるで城壁のようにしている。

「芽衣、元気そうだね」

「もう一年たつから言えるけど、あの時は心配したんだよー」

「シヨックだったよ。一緒にまた学校通えると思ってたから」

① 笑顔の芽衣姉ちゃんは、腿の上の手を固く握り締めている。青い血管が浮き出ている。

「こっちはもう大学決めるって追い立てられて大変だよ。宿題も多いし。七時間授業に補習授業まであってさー。三津高校はどお？」

「……まあ、普通かな」

「楽そうでいいなあ」

「進学校じゃないもんね」

彼女たちの言葉が、弘毅を不快にさせる。一年前までは芽衣姉ちゃんの友だちだったのに、と批判的になる。悔しいようながっかりするよ
うな気持ちだ。

女子高校生たちの後ろには背が高い男子高校生が立っている。細身の黒いダウンジャケットが似合う。彼は終始穏やかな表情を崩さず、女
子高校生から話を振られると頷いたり首を傾げたりする。見覚えはないが、彼女たちが話しかける内容から同じ中学校だったことは知れた。
彼は時折、芽衣姉ちゃんに視点をずらす。芽衣姉ちゃんもチラチラとその男子を見ている。でもタイミングがずれて、二人の視線が合うこ
とはない。

元同級生たちは、この先のカフェで勉強するということ。せんべいを前にカフェのスイーツの話 시작했다。芽衣姉ちゃんの相槌は完全に乾き
切っている。砂漠の砂を三日ほど天日干しにし、乾燥機にかけて乾煎りしたくらい乾いている。

② 雰囲気ガニスガスして、弘毅はその場から立ち去りたくなかったが、芽衣姉ちゃんをここに一人置き去りにするわけにはいかない。だけ
ど、芽衣姉ちゃんと同級生のやり取りを聞いていると、手が冷たくなってきて、背中が突っ張ってくる。なにか自分が罰を受けているような
気がしてきて胃がキリキリと痛くなる始末。

犬を連れお客さんが来た。弘毅は対応しようとする。

同時にせんべいの耳を切っていた安江さんも耳切り機の前から腰を上げてこちらにやってきた。が、芽衣姉ちゃんがそれより早く接客し
た。にっこりと笑みを向け丁寧に対応する。

犬連れのお客さんがせんべいを選んでのを待つ間に、元同級生たちは立ち去った。

③ 芽衣姉ちゃんは彼らの行き先へ視線を向けた。その時にはもう、元同級生らは直線道路を相当に遠ざかっていた。

見つめる芽衣姉ちゃんには、憧れが混じっていた。

接客を終えると、芽衣姉ちゃんは淡々とした様子で奥へ引っ込んだ。

バレンタインデーの翌日、家族が寝静まった深夜のことである。芽衣はバレンタインデーのために用意していた特別な包装のチョコレイト
をとかし、くだった南部せんべいをチョコの中に入れてお菓子を作っていた。物音で目を覚ました弘毅は、その様子をかくれて見守ってい
た。その後、芽衣はできあがったお菓子を持って二階の自分の部屋に戻っていった。

バレンタインデーが二日過ぎた夕方。

弘毅と潤がぶら下がり棒にぶら下がっていると、母の「あら、芽衣の同級生さん。いらっしやい」という声が店から聞こえた。

あのゴリラ、じゃなくて、猿連中がまた来たのか。睨んでやんなくちゃ、と使命感に燃えて弘毅は飛び下り、通り土間を店へと向かう。潤もついてくる。

「芽衣ー。同級生さんが来てるよー」

母が天井を仰いで呼んだ。

これじゃあ、居留守は使えまい。

二人は土間のガラス戸から店を覗く。

弘毅の警戒心がパチンと弾けた。

掃き出し窓の前に立っていたのは、ダウンジャケットの男子高校生一人きりだ。芽衣姉ちゃんとなかなか目が合わなかった男子だ。

④ 階段を足音が下りてくる。うんざりしているのが伝わる足音だ。

店が上がった芽衣姉ちゃんは、ぱたりと動きを止め、それはそれは真つ赤になった。

男子高校生が芽衣姉ちゃんに、ピーナッツせんべいを二袋下さい、と頼む。

芽衣姉ちゃんは、はいと返事をしたものの、声は硬いし掠れているし、せんべいの袋を二回取り落とすし。異様なぎこちなさを披露する。見ている弘毅は若干おもしろいが、その何倍もハラハラする。

お姉さん、様子が変じゃない？ 具合でも悪いのかな、と潤が小声で心配するので、弘毅は、安江さんが言うには芽衣姉ちゃんはこの男が好きらしいんだ、と声を潜めた。そう口にする、背中と腰から力が抜けそうになる。「うへえ」と顔をしかめた。

姉はチラチラと天井に目を向けている。

「上になにかあるのかな」

潤が見上げる。弘毅も天井に視線を向ける。

二階は芽衣姉ちゃんの部屋だ。多分、昨日作ったチョコレートに気にしてるんだ。てことは、アレか。この男子に渡すためのものだったってこと？ きつとそうだ。

この人に渡そうとして渡せずにオレにくれようとした高級チョコレート。それを溶かして、新たに南部せんべいで作り直した。芽衣姉ちゃんはリベンジする気だったんだ。

早く取ってきなよ。

弘毅は焦ってきた。せつかく作ったのに渡せないまま、また終わるんじゃないだろうな。

「芽衣姉ちゃん、ここ、オレが代わってもいいよ」

だから早く取ってきなよ、と目で促す。

しかし、芽衣姉ちゃんはいつもの冷静沈着^{れいせいしんちやく}っぷりも適切な判断力^Aもなくなり捨てました、と言わんばかりの様子で、「イヤ、イイ。大丈夫^{だいじょうぶ}」

と、片言の早口でまくしたて、まったく弘毅の意図を理解してくれない。

男子高校生はせんべいを買ったあと、立ち去るわけでもなくかといって話をするわけでもなく、弘毅からすると意味もなくその場に佇^Bんでいる。

ふいに、小さな声で名前を呼ばれた。振り返^{かえ}るとせんべいを焼いている母と目が合う。

母が階段のほうへ顎^{あご}をしゃくる。

行け、という意味だということくらいは見当がついた。

弘毅は踵^{かかと}を返した。家の奥へ走る。土間の出口から裏庭のかまくらが見えた。

その手前の階段を駆け上^あがると、芽衣姉ちゃんの部屋に突入^{とつりゅう}する。大量の服がパイプハンガーに下がっている。服をかき分けて奥へ行く、窓辺の日が当たらないところにひっそりと置いてある茶色い紙袋^{かみふくろ}を見つけた。探さずとも目につくところにあって助かる。それをつかんで、部屋を飛び出して店に駆け戻^{もど}った。

芽衣姉ちゃん是他のお客さんの質問に笑顔でこまやかに答えており、男子高校生は帰ろうとしているところだった。

「待ってください」

潤が男子高校生に声をかけた。

弘毅はギョツとした。まさか潤が呼び止めるとは思ってもみなかった。冷^ひや汗^{あせ}が出る。

男子高校生が肩越^{かたこ}しに振り向いた。

潤が弘毅を振り向く。それで？ どうするの？ と目で聞いている。

ど、どうしよう。

弘毅は手に持ったチョコレートを見下ろす。

芽衣姉ちゃんはまだ接客中。ということは――。

嘘^{うそ}、これオレが渡す感じになっただけなの？ いやいやいや。

弘毅は、チョコレートと芽衣姉ちゃんを交互^{こうご}に見て、ええとその、と口ごもりながら急いで頭を回転させる。

⑤「かまくら！」

弘毅の頭の中にはさつき目についたかまくらが残っていた。

いきなり面と向かってかまくら、などと怒鳴^{どな}られた男子高校生は、瞬^{まばた}きをした。

お客さんを見送った芽衣姉ちゃんが立ち上がり、木箱を迂回して、掃き出し窓の端に立った。

「あ、うち、かまくらあるの。弟たちが作って」

掠れた声で告げる。男子高校生は、顔を明るくした。

「そうなの？ 珍しいね。どこにあるの？」

「裏庭に……」

男子高校生が土間の奥へ目を向けた。

弘毅は思い切って言った。

「見ていきませんか。滑り台つきです」

「結構大きいんですよ」

と、潤が続ける。

「いいの？」

男子高校生が目を輝かせる。

あ、母ちゃんにこの兄ちゃんを家の中に入れていいのとかどうか聞いてなかった。

弘毅は母を窺う。

母は大福のような顔をふつくらと緩めて「どうぞー、靴をはいたまま入っていいよ」と手のひらを奥へ向けた。

「芽衣姉ちゃん、これ」

弘毅は紙袋を芽衣姉ちゃんに差し出す。

芽衣姉ちゃんは目を丸くする。

「店の手伝いはオレがやるから」

そう申し出て半ば強引に芽衣姉ちゃんと接客を代わる。

芽衣姉ちゃんが戸惑いの顔を店内に振り向ける。

安江さんがここにこで、胸の前に両手の拳を作る。

母が顎をしゃくった。

行け。

芽衣姉ちゃんは男子高校生を案内して裏庭へ向かった。

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注)

* 八戸市……………青森県八戸市。

* 三津……………青森県三津市。

* 小田せんべい店……………弘毅の祖父が営む南部せんべい店。弘毅の家。

* 安江さん……………小田せんべい店の従業員の女性。

* 潤……………弘毅の友人。弘毅とよく一緒に遊んでいる。

* 南部せんべい……………青森県南東部から岩手県北部にかけての伝統食品。小麦粉に塩と水と重曹を混ぜ鉄製の型で丸く焼いたもの。

* 踵を返す……………引き返す。後もどりをする。

問一

①「笑顔の芽衣姉ちゃんは、腿の上の手を固く握り締めている」とありますが、この時の「芽衣」の様子として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 高校受験の失敗を同級生たちがしつこくむし返すので、彼らの言葉に負けないように必死で対抗しようとしている。

イ 同級生たちの訪問を喜びながらも、もう中学生の時のように彼らと仲良くできないことにさみしさを覚えている。

ウ 落ち着いて同級生たちに対応しながらも、突然訪ねてきた上に弟の名前を間違える彼女らの無礼さに嫌気がさしている。

エ 突然の同級生の訪問に対し、おだやかに対応しようと努めているものの、内心では彼女らの嫌味に懸命に耐えている。

問二

②「弘毅はその場から立ち去りたくなかったが、芽衣姉ちゃんをここに一人置き去りにするわけにはいかない」とありますが、「弘毅」がこう考えているのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 芽衣と元同級生たちのやりとりでいたたまれなさを感じたが、孤立する芽衣のそばにいたいことと力になりたいと思ったから。

イ 芽衣の元同級生たちが芽衣にかける言葉に不快感を覚えつつも、自分が離れると芽衣にさらにひどいことをされると思ったから。

ウ 芽衣の元同級生たちのふるまいに高校生をこわいと感じたが、勇気をふりしぼり芽衣をどうにかして守ってあげたいと思ったから。

エ 芽衣と元同級生たちの会話を聞いて気まずくなったが、自分が立ち去るとあとで芽衣にこっぴどく怒られると思ったから。

問三 ———③「芽衣姉ちゃんは彼らの行き先へ視線を向けたく淡々とした様子で奥へ引っ込んだ」とありますが、この場面での「芽衣」

の様子を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア もう彼らと会うことは二度とないので、これからは自分に嫌味を言うような人たちと関わらなくてよいのだと安心している様子。
- イ 自分もつと努力して受験に成功していれば同級生たちと現在もいっしょにいられたはずだと、過去の自分を反省している様子。
- ウ 仲良く帰っていく同級生の姿にひかれながらも、どうしたら昔のように仲良くなれるのだろうかと切実になやんでいる様子。
- エ 自分が行きたかった高校に通う同級生をうらやましく思いながらも、今は自分のやるべき仕事に集中しようとしている様子。

問四 ———④「階段を足音がくそれはそれは真っ赤になった」とありますが、この時の「芽衣」の心情を五十字以上六十字以内で答えな

さい。

問五 ———A「かなぐり捨て」・—————B「佇んでいる」について、本文中での意味を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「かなぐり捨て」

- ア 荒々しく放り出して
- イ あわてて捨てたままにして
- ウ すっかり忘れ去って
- エ 細かいことを気にしないで

B「佇んでいる」

- ア 何かを探して辺りを見回している
- イ じっと目の前を見つめている
- ウ 立ち止まって作業している
- エ しばらくとどまっている

問六

——⑤『かまくら!』とありますが、「弘毅」がこの言葉を発したのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 芽衣が男子高校生に見せるために作ったかまくらを彼に見せないまま帰すわけにはいかないと思い、なんとか彼の気を引こうとしたから。

イ 芽衣自身の手で男子高校生にお菓子を渡せるまでどうにか時間をかせぐために、裏庭のかまくらを見せて彼を引きとめようとしたから。

ウ 芽衣が男子高校生のために作ったお菓子を自分が渡すわけにはいかないと思い、直接渡すことが大事だと芽衣に気付かせようとしたから。

エ 芽衣に会うために店へ来たはずの男子高校生がなかなか芽衣に話しかけないので、彼の方から芽衣に声をかける流れを作ろうとしたから。

問七

次の文は、中学生たちが本文から読み取れる物語の登場人物について発言したものである。この中で人物像を正しく読み取れていない人を一人選び、名前を答えなさい。

なつみさん 「『潤』は、動揺している弘毅をよそに、即座に『待ってください』と男子高校生に声をかけていることから、大胆かつ行動的な一面がうかがえるね。高校生相手にも物怖じしないその度胸はすごいなあ。」

はるきさん 「『母』は、『大福のような顔をふつくと緩めて』というところから、とてもやわらかくてやさしい表情をしていることがわかるよ。きっと日ごろからお客さんや子どもたちにもやさしく接しているんだらうなあ。」

たろうさん 「『安江さん』は、『にっこにこで、胸の前に両手の拳を作る』とあるように、芽衣を応援して元気づけようとしている様子がら、きつと弘毅と芽衣にとっては安江さんも家族の一員みたいな存在なんだと思うな。いつも芽衣や弘毅をそばで見守ってくれているんだね。」

たまみさん 「『男子高校生』は、『かまくら!』と弘毅に言われて『珍しいね、どこにあるの?』と芽衣に聞いているから、かまくらが見たくて芽衣の家に留まろうとしたんだね。もしかして最初からかまくらが目当てでせんべい屋を訪れたのかなあ。」

問八 本文の内容と表現の特徴の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 〰 a 「木箱をまるで城壁のようにしている」という表現は、嫌味な態度をとる元同級生たちに対する芽衣の怒りを、戦いに用いる「城壁」でたとえている。

イ 〰 b 「乾燥機にかけて乾煎りしたくらい乾いている」という表現は、芽衣が元同級生たちの言葉に対する興味を完全に失っている様子を表している。

ウ 〰 c 「猿連中がまた来たのか。睨んでやんなくちゃ」という表現は、芽衣の元同級生たちを「猿連中」と表記することで彼女らに対する弘毅の敵対心を表している。

エ 〰 d 「背中と腰から力が抜けそうになる」という表現は、大好きな芽衣が他の誰かを好きだということを、受け入れられない弘毅の複雑な心境を表している。

問九 次の文章は本文の翌日の場面である。これを読んで後の問いに答えなさい。

翌朝、登校前に芽衣姉ちゃんがクランチチョコレートを弘毅にくれた。

「余ったやつ。お返しに学校へ持っていきな」

「いいの?」

「うん、この間作ったの」

芽衣姉ちゃんには、弘毅が見守っていたのが知られていないようだ。おもしろいが、それは顔に出さないように注意する。

「作ったの? すごいね。大変だったんじゃない?」

「大したことないよ。どこにも売ってないから値段も知られないでしょ」

「ありがとう!」

「こちらこそ」

芽衣姉ちゃんがなんで「こちらこそ」と言ったのか分からなかったけど、それはどうでもいい。自分で作らずとも手に入ったし、買うために小遣いをねだらずにすんだのだからラッキーだ。

(高森美由紀『小田くん家は南部せんべい店』より)

——「芽衣姉ちゃんがなんで『こちらこそ』と言ったのか分からなかったけど」とありますが、あなたは芽衣が弘毅に「こちらこそ」と言ったのはなぜだと考えますか。本文の内容をふまえて答えなさい。

三

次の①～⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨～⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① ケイトウだてて考える。
- ② レイゾウコに肉をしまう。
- ③ 豊かな心をハグクむ。
- ④ 答案にゴジが多い。
- ⑤ オウチャクしてとびらを足でしめる。
- ⑥ 力の差がレキゼンとしている。
- ⑦ バンジ休すと観念する。
- ⑧ 大臣の発言はイサミアシだ。
- ⑨ 町の治安を守る。
- ⑩ 姉は軽やかにおどっていた。
- ⑪ 小魚をたくさん食べる。
- ⑫ 食後に果物を食べる。

